
本気の初恋

翳鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本気の初恋

【Nコード】

N1379BA

【作者名】

翳鴉

【あらすじ】

幼い頃、幼馴染が初恋の相手だった少年、雷世。そして告白したが、その時に振られてしまい。そのショックで幼馴染と離れて10年後。

プロローグ 1

恋をした。

だけど、俺の恋は普通じゃない。

幼馴染に恋なんて、ありえるわけが無い。

自分自身の思いを押し殺してずっと一緒に居た。

だけどもある日…。

「お前の事好きなんだけど…。」

言ってしまった。

「ごめん。同姓はなし。俺はお前の事幼馴染でいい奴と思ってたから。」

振られた。

自分自身が悪かった。

だから諦めた。けどあいつを思うほど、俺の心もボロボロだった。

そして、あいつの目の前から離れて10年後。

黒咲 雷世

20歳の男。

生意気で冷静？で結構親切で優しい。

褒められると単純に照れる。

小説が大好き。

金持ちの一人息子。

守川 幽

24歳の男。

生意気で横暴でいじめるのが好きで案外優しい。

小説の編集者。

10歳の妹と二人暮らし。

橋川 紅葉

20歳の男。

明るくて優しくて真面目。

雷世の幼馴染で初恋の相手。

1話 幽×雷世 1

幼い頃、幼馴染に恋をして、思い切って告白した。

だけど、振られた。

そのショックのせいで俺はそいつから姿を消した。

そして10年後 。

「早い！展開が速すぎる！！」
と部屋で小説に文句を言っていた。

俺の名前は『黒咲雷世』
小説が好きすぎる男。

「…はあ…この続きと後金振り込んでもるか見て来るか。」

雷世は家の鍵を閉め、本屋に向かった。

そして、本屋に着く。

さっき読んでいた小説の続きがラスト一冊しかなかった。

「…はあ…こう言うの読んでる自分がバカらしい…。」ボソッ
ドンツ！！

雷世が誰かとぶつかった。

そして本を落とす。

「痛ッ！…。」

「悪い！大丈夫か？」

「…あんたこそ。」

雷世は立ち上がる。

「ん？恋愛小説？」

バツ！！

雷世は自分が買おうとしていた本を男から取り上げた。

「!?!?。」

雷世は顔を赤くした。

「それ。。。」

「なんだよ…男がこんな物読んでたら駄目なのか!」

「違う。それ俺が担当した小説。」

「!?!?…あなた、もしかして小説編集者?。」

「うん。ってこれから時間あるか?」

「ある!あなたに聞きたい事がある。ちょっと待って。」

雷世は本の支払いに行った。

「あつそうだ。俺は黒咲雷世。」

「って、お前気軽に知らない人に名前教えていいのかよ。」

「今顔をあわせた。これでもう知り合いだろう?」

「!?!?…ははははは、お前変な奴だな。」

「変な奴っていうな!!!」

「俺は、もりかわゆう守川幽。」

「守川。」

「何で苗字?」

「いや…なんとなく。」

「ははーそうかよ。」

そして雷世と幽は本屋を出た。

「あつ…金…。」

「俺がおごる。」

「そっか?だけど返すからな!」

「分かった。じゃあメモってるよ。」

「分かってる!!!」

雷世は幽の軽い挑発にムキになる。

可愛いカフェのお店に入る。

雷世はさつき買った小説を開ける。
そして読み始める。

「小説、すきなのか？」

「あつおう。」

「集中力が半端ないな。」

「そうか？だけど、守川が担当してる小説かあ。」

「どうかしたのか？別に他のと変わらないだろう？」

「別に。俺この人の書く小説全部持つてるぜ？」

「?!…それ全部俺が担当だぞ？」

「うん。だつてこの人の書く小説。面白いんだけどちょっと展開が速いというか「ニコッ

「お前つて結構、いい奴？」

「そんなわけないだろうが!!」

雷世は顔を真っ赤にする。

「照れるな。」

「照れてない!!」

雷世の携帯が鳴る。

「はい？」

雷世は電話に出る。

『あつ、雷世か？』

「??どちら様？」

『俺だよ。紅葉。』

「!?!?。」

『久しぶりだな。今日なお前の所行くから。よろしく。』

「無理！俺今日は家に帰れないから！」

『何でだよ。お前仕事とかしてないだろう？』

「お前に関係ないだろうが！ボケ！今日は誰かの家に泊まれ！」

雷世は怒って電話を切った。

「どうかしたのか？」

「…あつ…守川！今日家に泊めてくれないか？」

「いいけど、俺の家には妹が居るぞ？」

「それでもいい。」

「そっか？ならいいけど。」

「サンキュ！」「ニコッ」

雷世は幽の家に泊まる事に。

「…はあ〜雷世って本当に照れ屋だな。」

2話 幽×雷世 2

「……………」

雷世は暗かった。

ずっと、顔を下に向けて歩いてきた。

何で…なんであいつが…追ってきた？俺を…。

雷世は横に首を振る。

「大丈夫か？お前？」

「?!…ああ…おづ。」

「もうすぐ着くぞ。」

「分かった。」

つて…もう何も考えるな!!俺等しく無い…。

「着いたぞ。」

「……………」

雷世の目の前には大きな建物があった。

「マンション？」

「そうだけど。」

「そっかーってでかいなあ〜」

雷世は棒読みであたりを見る。

「お前、あんまり驚いてないな。」ニッ

「別に…俺の家もこれよりデカイしな。」

「マジかよ。」

「おづ!」「ニコッ」

雷世と幽はマンションの中に入り。

幽の部屋まで行った。

ガチャッ

「お兄ちゃん、おかえり！」ニッコッ

「ただいま、唯^{ゆい}」ニッコッ

「?!...」

幽の家に入ったら小さな女の子が出迎えてくれた。

「あっ、初めまして。守川唯^{もりかわゆい}です！よろしくお願いします。」

唯は丁寧にお辞儀をしてあいさつした。

「...俺は...黒咲雷世。」

「雷世お兄ちゃん！」ニッコッ

ドキッ

「!?!...ああ...」

雷世は頬を赤く染めてなぜか焦っている。

「唯。雷世が照れてるから。その辺な！」ニッコッ

「照れてない!!」

「そうか？」

「子供の...対応が分からないだけだ!」

「ふ〜ん、そうには見えないけどなあ〜」

ギクッ!

「.....」

一々むかつく...。

「じゃあ、私は晩御飯の用意するね」ニッコッ

「あっそうだ。今日は雷世が泊まるからな。」

「えっ!雷世お兄ちゃん泊まってくれるの!?!」

なぜか唯は雷世が泊まると聞き、目を輝かせる。

「...ああ、理由が合ってるな。」

「じゃあ!今日のご飯は豪華にする!」

だから、お兄ちゃんも手伝ってね!!」

「はいはい。」

「って、守川って料理できるのか?」

「出来るけど?」

「そうか?」

「なんだよ?」

「別に?」

「もしかして、お前出来ないの?」

ムカツ!

「?!…できるわ!俺をバカにするな!!」

「じゃあ、勝負するか?」

「!?!…おう!やってやる!!」

雷世はまたまた、幽の挑発に乗ってしまった。

「ってお兄ちゃん!雷世お兄ちゃん、お客さんだよ?」

「いいんだよ!」ニコッ

「もう。しょうがないなあ、雷世お兄ちゃん頑張って!!」ニコッ

「!?!…分かってる?」

雷世は少し焦っていた。

…ヤバイ、俺料理できない!!…って人生で料理なんて1回も…。

「で、何料理作るんだ?」

「唯が決めてくれるよ。」

「料理というか…林檎の皮を向いてね」ニコッ

「勝者が敗者に一つだけ命令を聞かせるでよくないか?」

「…分かった!受けて立ってやる!!…!」

幽と雷世は包丁と林檎を持つ。

「よい！！スタート！！」

「……………」

雷世は林檎をじっと見ていた。

どう剥く？俺いつも林檎なんてかじってるんだけど……………」

雷世は幽の方を見る。

幽は器用に林檎の皮を剥いていた。

「……………」

「雷世？どうかしたのか？」

ハッ！！

「?!……………べ、別に何でもないし！」

雷世は頬を赤くする。

何、俺見とれてるんだよ！！……………相手は男だぞ……………」

「……………」

雷世も林檎の皮を剥いていく。

ブスッ

「痛ッ！！！！」

雷世は包丁で指を切った。

「大丈夫か？」

「大丈夫？雷世お兄ちゃん？」

「ああ……………大丈夫だ。」

「チツ……………」

「!?!……………」

幽は雷世のきつた指を舐めた。

「唯、布とかある？」

「あるよお……………！！」

雷世のきつた指に布を巻く。

「これで大丈夫だろう？」

「…ありがとう。」

「お前、料理できないだろう？」

「！？…悪かったな！俺は不器用だよ…。」

「はいはい。」

そして、料理は出来て、皆で仲良く食べた。

それから遊んだり、勉強教えたりして、一日を終わらせた。

「……。」

だけど、皆寝ていたが俺は起きた。

そして、携帯を見た。

「！！？…。」

カタッ

携帯を落とす、雷世。

「…紅葉…。」

今夜12時に　公園で待ってる。

「……。」

会いたい…会いたくない…。

だけど俺は…。

ガチャッ

そのまま行ってしまった。

プロローグ 2

「はい！！皆さん、今日も元気かな??」ニッコ

「本当に、人気だよねえ〜夜昂やこう」

「マジ、それ思ったあー!!!」

人間は大嫌い。何年経っても、好きになれない。

それが俺の、運命さだめならば、しょうがない。

そして、ある日…俺に不幸がやってくる。

パンツ!!

時間 夜光やこう

19歳の男。

生意気で素直で極度の単純バカ。

女装している。

大人気の有名モデル「夜昂やこう」

人間が大嫌い。

煤城 黒弥くろみや

23歳の男。

口下手で極度の人見知り。

人が居ない所だと、性格変わるらしい。
マフィアのボスでなぜか日本にやってきたらしい。
雷世の両親と知り合いらしい。

3話 黒弥×夜光 1

カシヤツ

「そうそう、もっとポーズをつけて！」

カシヤツ！

「もっと、笑って！」

カシヤツ！

何が楽しいのか分からない。

ただ、楽しそうな俺を取ってるだけだろうが。

「よし、じゃあ休憩にしようか！」ニッコ

「はい！分かりました」ニッコ

俺はただの、操られた人形なのだろうな。

「今日も絶対調だね、夜昴」ニッコ

「別に…。」

女の子の服を着ているが男である。

名前は『時間』夜光』

「……。」

俺は望んで、こんな格好や仕事をしたくない。

ただ、あいつが言うから。

「夜昴ちゃん。今日はもう帰っていいよ」ニッコ

「はい。今日はありがとうございました！お疲れ様です」「ニコッ
夜光とマネージャーはその場から去って行った。

「俺、もう帰る。」

「えっ？これからまで仕事が！！」

「全部キャンセルすりゃーいいだろうが。」

「ちょ！夜光！！」

「……。」

夜光は女の服を脱いで部屋から出て行った。

「……だるい。」

夜光は公園のベンチで座っていた。

世界はつまらない……誰か俺の理想をぶち壊してほしかった。

夜光は夜までベンチで座っていた。

「夜かあ……もう帰るか。」

「ハア……ハア……。」

「ん？。」

「ハア……グッ！」

「！？……。」

バタンッ

木の側で人が倒れていた。

「おい！大丈夫か？」

「ん？……誰？」

「！？……。」

倒れていた男が突然、夜光の顔に触れる。

「人？……何か、可愛い。」

「？！……なっ！……。」

夜光は顔を真っ赤にする。

フラッ

「…ヤバイ…。」

ボタンッ

「おい！おい！！」

男はそのまま眠ってしまった。

パチッ

「ん？…。」

男は目を覚ます。

「…あつ。」

「ZZZZZZ。」

夜光はベッドにもたれて座りながら眠っていた。

「…俺の事を助けてくれたのか…。」

「ん？…あつ起きたのか？」

「……。」

夜光は起きたたてでボーンとしていた。

「俺を助けてくれてありがとう」「ニコッ

「！？…。」

夜光は寝められて一気に顔を真っ赤にした。

「どうかしたのか？」

「…な、なんでもない。」

「じゃあ、これが俺のお礼だ。」

「！？…。」

男が夜光の唇を塞いだ。

「な、何すんだよ！！！！」

夜光は顔を真っ赤にした。

「別に、俺今日からここに居ていいか？」

「なっ!?!?…。」

「お前、有名人だろう？」

「何でそれを!?!。」

「なんとなく。似てるなあ〜って。」

「!?!?…。」

夜光は焦る様子だった。

「分かったよ。」

「ありがとう」「ニッコッ

ドキッ!

「!?!?…。」

夜光は顔を真っ赤にした。

「俺は、すすしろくろみ煤城黒弥よろしくな」

「俺は、時間夜光。」

「うん、じゃあ今日からよろしく」「ニッコッ

…おっ。」

4話 黒弥×夜光 2

「あれ？今日は仕事行かないの？」

「行かない。」

「何で？」

「面倒だからな。」

「それだけか？」

「おう。」

「お前素直だな。」

「そうでもない。」

黒弥は朝からゲームをしていた。

夜光は寝転びながら、雑誌を読んでいた。

「マネージャーが迎えに来ないのか？」

「来るけど、電話してくるなって言った。」

「はあ！？なぜだ!？」

「鬱陶しいから。」

「ふん。」

「俺は、別にやりたくてやってるんじゃない。」

「そっか。」ニコッ

黒弥は夜光の頭を優しく撫でる。

「……………」

「どうかしたのか？」

「なあ、前から思ってたんだけどさ。」

「ん？」

「お前って何者だ？」

「!?!?……………」

「最初にあつた頃、ボロボロだっただろう?。」

「……………」

黒弥は何か悲しい顔をする。

「どうなんだ？」

「…今はいえない。」

「そっか、なら買い物でもいこうぜ!」「ニッコ

「ああ、分かった。」

そして、二人は商店街に向かった。

「…あのっ…。」

「……………」

「黒弥さん?…。」

夜光はなぜか顔を引きずっていた。

「…ひ、ひ、ひ、ひ、人!!。」

「黒弥!お前キャラ崩壊しすぎだろう!!。」

「……………う…夜光、助けてくださいい。」

ドキッ!

「!?!?……………」

夜光はなぜか、顔を赤くした。

「分かった…。」

「…ありがとう!!。」

「!?!?…。」

黒弥が夜光に抱きつく。

「なっ!?!…離れる!!。」

夜光は顔を真っ赤にさせる。

「で、何買うの?。」

「林檎。」

「林檎?…どうして?。」

「林檎が喰いたいから。」

「そっか」「ニッコ

夜光は店で林檎を買った。

「…疲れた。」

「有名人なのに、結構ばれないんだね」「ニコッ
「?!...」

周りの人が夜光を見る。

「...ちよつとこつち来い!!...!!」

そして、二人は誰も居ないところに来た。

「ハア...お前な!!」

「何で隠すんだ?」

「!?!...」

黒弥は夜光に顔を近づける。

「本当は男だつて、ばらせばいいだろう?」

「!?!...それは...無理だ。」

「なぜ?」

「...俺が...臆病だから...」

「何で、そう思うんだ?」

「!?!...」

夜光は顔を真っ赤にする。

「黒弥...」

「何?」

「顔が...近い!!...!!」

「照れるな。」「ニコッ」

「照れてない!!」

「まあ、いつか。帰るぞー。」

「...」

俺は臆病なのか?...まあ、いいや。

プロローグ 3

僕は一人だ。

いつも、いつも。

だけど、笑っていないと。

皆が困る顔をする。

だから、いつも…。

「僕は大丈夫だよ！皆が楽しかったら僕はそれだけで嬉しい」「ニコッ

そんな奇麗事、今になれば…。

だけど、ある日出会ってしまった。

僕の本性をはがす男が…。

あきさか
秋坂 葵 あおい

18歳の男。

明るくて優しそうに見えるけど本当はとてつもなくネガティブ系。
極度の貧乏人。（ホームレス並）
最強の武道家。

みねがし
峰岸 京介 きょうすけ

21歳の男。

生意気で明るくて結構強引でSっぽい人。
幽と仲良しの小説編集者。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1379ba/>

本気の初恋

2012年1月6日15時45分発行